

石森延男児童文学全集

15

観光列
生きるよろ



諸葛齊（しよかつさい）も春さかり



諸葛齊

春さかり

石森延男

昭和四年

作



石森延男児童文学全集 第15巻 定価 1000 円
観光列車・生きるよろこび

N. D. C 918 学 習 研 究 社 1971 年 324 P 23 cm

昭和 46 年 11 月 1 日 初版発行

著
作
権
所
有
者
の
了
解
に
よ
り
検
印
廃
止

著 者 石 森 延 男

発行者 古 岡 秀 人

発行所 株式
会社 学習研究社

東京都大田区上池台 4—40—5
郵便番号 145 振替東京 142930
電話東京 (720) 1111 (大代表)

オフセット印刷 株式会社金羊社
活版印刷 暁印刷株式会社
製本 株式会社国宝社
本文用紙 北越製紙株式会社
表紙クロス 望月株式会社
製函 竹生紙業株式会社

© 1971 Printed in Japan

8393—638 215—1002

この本についてのお問い合わせ製本上のミスなどがありましたら下記あてにお知らせください
学研 ユーザー・サービス本部児童図書係 東京都大田区上池台4-40-5(〒145) Tel. 03-727-1600

もくじ

観光列車

バラもお国ぶり	7
ホシハキラキラ	10
天上地上	13
兄と妹	17
するどい指	23
沖繩紀行	28
瀬戸で	36
音の世界	41
ハスの実	44
白	53
まり投げ	65
茶碗谷先生	69
マスターレス・アイランド	74
わすれかねることば	76
ナイヤガラ滝	88

夕ぐれ二つ	90
木田金次郎さん	93
ケートさん	101
春の雨	103
クラーク先生	108
ある記録映画	114
藤の花ぶさ	119
波よ	125
露伴のこと	128
ぼくは捕手だった	135
羽衣の碑	136
地球の美よ	141
観光列車	147
生きるよろこび	159
土台	159

ふるさと	164
地球儀	170
その国の花	179
心の握手	184
考える葦	191
二つぶの涙	196
野の花と貝がら	199
古いパレット	206
山二つ	215
藤の花ぶさ	225
めでたしめでたし	232
アゲハチヨウ	244
水と人間	249
めぐりあい	256
人間さま	270
春ちゃん	275

◆著者紹介

1897年、北海道札幌に生まれる。東京高等師範学校（いまの東京教育大学）卒業。文部省図書局で国定国語教科書の編さんにあたる。現在昭和女子大学教授、日本児童文学学会会長。『モンクーフオン（咲き出す少年群）』で第3回新潮賞受賞。

『コタンの口笛』で第1回小川未明文学賞およびサンケイ児童出版文化賞受賞。

『パンのみやげ話』で第1回野間児童文芸賞受賞。

■装丁 香川軍男

■さし絵 関野準一郎

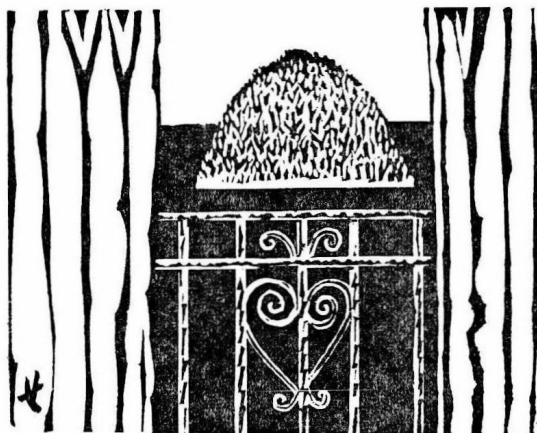
■題字 石森延男

広小路	280
三人の中学生の友だちへ	292
ほんとうのものは	303
*あとかぎ	309
*石森延男略年譜	313
*石森延男著書・随想文・試論目録	317

観 光 列 車

(中学生エッセイ)

小泉繁先生にささぐ



バラもお国ぶり

わたしは、Nくんのバラ園はなぞとの中に立ちました。

二、三日ふりつづいた雨が、ようやくあがった風のない午後です。

「雨は、バラの花にとっては、いちばんのにがてなんです。雨に打たれると、花の色が、かわってしまふし、つやがなくなるし、それに形もくずれがちになりますから——」

Nくんは、そういって、あたりにさいているバラの花を見まもるようにしました。

五月の二十日ごろ、いちばんバラのいいときだから、ぜひそれを見にきてほしいと、さそわれていたので、わたしは、この日に、たずねていったのでした。

Nくんは、岐阜ぎふという町に住んでいる医者で、医科大学につとめています。中学生のころからバラがすきで、ひまをみては、こうしておくさんといっしょに、バラを育てているのです。

「つとめの帰りがおそくなって、日がくれてしまうことが、よくあります。でもちょっとでもバラの顔を見ないと、うちに、はいれないですよ。」

かいちゅう電燈を出してもらって、バラ園をひととおり見まわり、それでやっと気がすんで、家にはいるということでした。

「葉を見ると、そのバラが、じょうぶに育っているかどうか、すぐわかるんです。葉がつやつやして、しっかりしていると、きつと花はりっぱにさきますが、もし葉が、ぐあいわるいと、花もおもしろくありません。」

「やっぱりお医者さんだな。」

と、わたしがいうと、Nくんもわらいました。

「この庭には、どれくらいの種類しゅるいがあるかな。」

「そうですね。八十種ほどありますう。」

「ずいぶんあるな。」

「みなちがった顔で、いいにおいをただよわせてくれますよ——」

「バラの顔を見て、なんの種類か、すぐわかるんだろう？」
わたしは、そのへんにさいているのが、みな同じように見えるので、こんなおろかなことをたずねると、

「そりゃあわかりますとも。」

へそうだろうな、何人、子どもが集まっていますが、受け持ちの先生は、ひとりひとり子どもの名を知っているんだから、こんなあたりまえのことをたずねて、自分でもおかしくなりました。

「このたまご色のバラは、ダイヤモンド・ジュビリ、それからそのとなりはインデペンデンス——」

そういつて、まっかなバラをさしました。つぎの肉色のはファッション、白くむらがってさいているミッシェリンカーン、かわいいビルゴ、うすべにのマーガレット、白バラのホワイト・クリスマス——つぎつぎ名を教えてくださいました。

おぼえようとしてましたが、一度聞いただけでは、なかなかおぼえられません。そんなことにはおかまいなしに、Nくんは、どんなバラをさしては、名をいいつづけます。

「この大きなのは、サボイヤ、このうすいべに色が、いいでしょう。それからこちらの黒バラは、ボンヌイ、おやすみなさいという名、おもしろいですね。」

Nくんは、かわいいわが子を、わたしに、紹介でもするよ
うに、教えてくれました。

「まあ、すこし、やすもう。とてもおぼえられん。それにし

ても、こんなにきれいにさかせるまでには、薬をかけたか、こやしをやったりでたいへんだらうね。」

「そうですね、薬は、四、五日おきにかけろし、でも、その薬は、どくがまじっているから、気をつけないといけないでしょう。それで家内が、薬をふりかけるのを、子どもたちが、とてもしんばいして——」

「からだにさわるんだね？」

「マスクをしっかりして、薬をまくんです。そのあとは、かならずおふろにはいつて——」

「たいへんだな。」

「風が吹けば、吹いたでしんばい。雨がふればふったで、これもしんばい、あまり日照りがつづいてもこれまた、しんばい——」

「しんばいづくしだね。」

「しんばいづくしだから、かえってかわいくなるのかもしれない。人の子も同じじゃないんですか。」

「何年ぐらい、バラをやってるの。」

「十三年ほど——いろいろな国のを育てていると、バラにも、やはりその国、その国のお国がらというものが、出ていくことがよくわかりますね。」

「そうかな、どんなふうにな？」

「ドイツのバラは、色がえんじで、どっしりとしており、フランスのバラは、ひんのいい間色かんしよくが多いんです。イギリスは、ピンクとか、べにとか、むかしからつたわったこのみ、そのほかイタリアでも、オランダでも、スペイン、アメリカでも、それぞれにいい味があつて、その国らしいすがたを見せてくれますよ。」へ花も、お国ぶりを見せるのかな。とのおもしろく思いました。

Nくんがいなかの中学生であつたころ、一年間だけ、国語を受け持ったことがあるのです。わたしが先生になりたてのはやはやのころです。そのころのことをNくんは、よくおぼえていて、わたしのすっかりわすれているようなことを、手まね足まねで話をして大わらいをしました。

へ教え子が育てたバラ園に立ち、花にかこまれて、おたがいのわかいころを語りあうなんて――

わたしは、しあわせだなと感じました。

「つい三日ほどまえ、岐阜ぎふの町にある、盲学校もがっこうの子どもさんたちが、このバラを見にきてくれましたよ。」

「見に？」

「先生がつれてきてくれるのです。目の見えない子どもさんたちは、それぞれ手でさわってみたり、においをかいでみたり、そりゃ、ねっしんに見てくれましたよ。バラの名も、よくおぼえてね――」

へ目あきのわたしが、ちっともおぼえないのになあ。と子どもたちが帰るとき、ひとえだずつ、バラをわけてやりました。みんな喜んで――

こうしてNくんとおくさんは、バラで、見る人を楽しませ、病む人やをなぐさめ、目の見えない子どもまで、なぐさめています。

へどうかすると、ぎすぎすになりがちな人の心をいたわり、なおしてくれるお医者さんだな。とと思ったのです。

ホシ ハ キラキラ

つぎの話は、盲学校もうがっこうのA先生がわたしに聞かせてくれたのです。

子どもたちは、ラジオより、やはりテレビのほうをこのみます。目が見えないのにと思うかもしれませんが、テレビがおもしろいというんです。ラジオだと、なんだか、うそらしいけれども、テレビは、ほんとうだと感じるのだそうです。

テレビは、そこに出てくる人が、じっさいに、向きあって話をする、しぐさをいれておたがいに、ことばのやりとりをする、だから、ことばがほんとうのものだと思われるのです。よう。

それでテレビが始まると、子どもたちは、みんなその場に集まってきて、ねっしんに見るのですよ。ことばのちょっとしたやりとりで、その場面が、うそかほんとうか、わかるのだから、わたしたち目あきよりは、ずっとするどいものを

もっているにちがいありません。

わたしたち教師のことばを耳にしても、これと同じことを感じているのでしょうか。口さきで、さも、いいようなことをいっていても、それが、ほんとうにかわいがっているのか、ごまかしているのか、びんとくると思います。そう考えると、わたしたちは、いつも心がすっかり見通されるようで、それおそろしくなります。

けれども、子どもたちが、わたしを一度信じてくれると、それこそ、まったく信頼しきってしまい、こちらのいうことを、すこしもうたがいません。それどころか、たとえ、むりなことをいっても、まちがったことをいっても、そのまま受けとってくれるのです。まっすぐで、にごりのないその気持ちには、こちらが、おされてしまうことがあります。

このあいだも、わたしが、かぜをひいて、熱があったのですが、学校に出てきて、国語を教えていました。すると、ひとりの子どもが、

「先生、かぜをひきましたね。」

と、とつぜんいいます。わたしが、びっくりしていると、
「先生、すこし熱がありますよ。」

と、気づかってくれたのにはおどろきいました。たぶん声

や息づかいがちがつていたのでしょう。

声とか、物音とか、空気の動きとか、そんなものを、どれほどこまかに聞きとり、気づいているか、ちょっとそうぞうがつかまいません。

寮に、小鳥をかつているのも、その声を楽しむためです。

かごの中で遊んでいる小鳥のようすを、その足音や、羽音で
見ているんですね。メジロがいます。ウグイスもいます。

耳が進んでいるせいか、音楽は、みんなだいすきです。音楽を聞くときは、いかにも明るい顔で、楽しくささやきあっています。音楽にただよう自由な世界を、たつぷりと味わっているように見えます。

遊ぶとき、音を手がかりにしてゆかいにやっています。このごろはやっているのは、ピンポンです。

ピンポン台を、ネットなしで、ピンポン玉をころがすのです。玉には、なまりのすずがはいっているから、コロコロゴロゴロといった、いくらか重いひびきをたてて、ころがりま

す。
子どもたちは、両手にバットをもっていて、ころがつてきた玉を、受けかえます。するとコロコロゴロゴロところがつていく。相手が、うまくそれを受けかえます。落したり、受け

そんじたりすると負けになる。ときには、強く受けたり、玉をきったり、器用なことをする、見ていても楽しそうです。

わたしが聞いているのは、ただコロコロゴロゴロと同じひびきですが、子どもたちがこれを聞けば、玉の速さがわかり、ころがつてくる方向もわかり、その位置も、わかるといえます。

それにしても、読むことと、書くことにいちばんほねがおれます。両手で点字をさすりさすり読むのですが、なれるまでたいへんです。いったんわかればかなり早く読みます。

文字は、表音文字ですから、一字一音の記号です。けれども、ひろい読みをするのではなく、一語ずつ、ことばとして、読みとっています。たとえば、

クレイナバラノハナガサイテイル。

という文は、「キ」「レ」「イ」「ナ」と、きれぎれに読まないで、「クレイナ バラノ ハナ」と読む、つまり意味をつかみつかみ読むけいこをしています。ですから、あんがいなれると早く、たしかに読めるようになります。

これにくらべて、書くことは、そうはいかない。どうしても一字一字、書いていくよりしかたありません。そのうえ、左文字に書くことになります。点字ですから、読むときに、裏がえしにするためです。ポツポツポツポツと、点字板で点



を打ちこむのは、見ていてさえよういではありません。

ですから、書きあげた作文は、たいせつな、かけがえのないものなのです。苦しんで一字一字書くものだけに、いいことしか書きません。ほんとうに感じたことしか書きません。むだなことや、つまらないことは、いっさい書きません。それだけ、作文は、しぜんに力のこもった、いきいきしたものになります。

いつか、こんな作文を書いた子どもがいました。

「ホシ ハ キラキラ ヒカッテ イル ト ミンナ ガ
ユウ。ボク ハ ホシ ヲ シラナイ。デモ ナンダカ ネ

コノ ナキゴエ ミタイナ キ ガ スル。」

この作文ももちろん点字で打ってあるのですが、ほかの人にわかるように、かたかなに書きあらためたのです。

このようなことばが、ふきでるのを見て、わたしは、うれしいやら、いじらしいやらで、毎日を子どもといっしょにくらしているのです。

子どもたちは、みんななかよしで、よく助けあっています。ものがうすく見える子どもは、まったく見えない子どもをいたわって手をひいてやります。

道を歩くときは、白いつえをつきながら、いっしょにかたまって気をつけあいます。

うれしいことがあれば、話しあって楽しみ、だれだれがこまっていると、なんとかしてはげまそうとします。

弱いということ、不自由だということが身にしみているだけ、なかまをしんからいたわるのでしょうか。

これは、たっしやな子どもたちの学校では、ちょっとうかがえない人間らしい美しさだと、胸うたれます。

天^{てん}上^{じやう}地^ち上^{じやう}

一九六五年三月ソ連で、ボスホート二号という人間^{えんせい}衛星^{えんせい}をうちあげました。

飛んでいるさいちゆうに、レオーノフ中佐は、宇宙^{うちゆうせん}船^{せん}からとびだしていつて、ふわふわとおよいだということ、それが新聞の写真に出たり、テレビで放送^{ほうそう}されたりしました。

レオーノフ中佐と宇宙船とは、つなでつながっていて、もどるときには、そのつなにつかまって、たどりつくという説明も聞きました。文字どおりいのちのつなでしょう。

ものすごい速力で飛んでいる宇宙船のように思われるのに、テレビで見るそのようすは、ちょうど高速度^{こうそくど}さつえいのようなかっこうに見えました。こんなにゆっくりおよげるものなら、わたしがよくみかけるゆめと同じです。

一時間あまりで、この地球をひとまわりするという速力を、頭にえがいているわたしの気持ちと、テレビにうつるゆるやかさとは、どうしてもむすびつきません。

宇宙世界などに、すこしも知識のないわたしは「知らぬがほとけ」で、ずいぶんのんきで、ゆかいそうだなとおもしろ半分で見えていました。

わたしのみるゆめでは、両足をばたつかせ、両手でかきわけ、思うままに飛びまわるのです。からだをななめにして、すべりおるときは、とても気持ちがいい。このごろは、あまり、そんなゆかいなゆめには、出あいませんが、少年のころは、しばしばみたものでした。

レオーノフ中佐が、宇宙服を着てカブトムシのようなかっこうで、ゆっくりゆっくり動くのをながめて、まったく少年のゆめを思いだしたのです。

「ゆめを実現する」ということばがありますが、これは文字どおり、目の前にゆめがあらわれた感じですよ。

無事にボスホート二号が地上に着陸^{ちやくりく}したとき、記者たちに、

「感想は、いかが。」

と、きかれて、レオーノフ中佐は、

「宇宙は、かぎりなく広く、深かったよ。」

と答えていました。

「かぎりなく」ということばと「深かった」ということば

が、わたしには、感動をもたらせました。人間わざというものが、宇宙にいどんで、ある成功をおさめたとしても、どれほどのことであろうという意味をくみとられたからです。みんなが手ばなしで大きわざをしているとき、こうしずかに語ったことばはなかなか印象的いんしょうてきでした。

このあとすぐアメリカでは、ふたり乗りの宇宙船が発射はつしやされました。これでは、宇宙およぎは、できませんでしたが、飛ぶ軌道きどうをかえる実験に成功したといえます。これもやはり宇宙飛行史上はじめてのことです。そののちだんだんとロケットの飛行が進んで、とうとう月にとどくことができるようになりました。また宇宙ステーションがまもなくできるといえます。こうなると、宇宙旅行は、いよいよだれにでもできる時代がやってくるでしょう。

中国に「西遊記」という物語があります。これはインドにお経きやうをとりいくお坊さんと悟空ごくうたち三人ののですが、いろいろ苦勞をするおもしろいお話です。

宇宙を自由自在に、しかもものすごい速さで飛べる悟空は、思うぞんぶん飛びまわり、こんなに遠くまで飛べるのは、天下にただひとりだといばりますが、なんとその広さは、わずかにほとけさまのてのひらのすみっこにすぎません

でした。

「西遊記」が書かれたのは、四百年もまえのこと、人間が、広いとか、遠いとか、大きいとかいったところで、ほとけさまの目から見れば、ちっぽけなものだということを、おもしろくたとえ話で書いたのです。

いまでは、人間のちえがいくらかすすんで、地球の大きさもわかり、音の速度も、光の速度もわかり、月や太陽のへだたりもわかり、星の位置も、そのへだたりもわかってきました。

わかれば、わかるほどそのつぎの宇宙が顔を出して、いよいよ広くて、いよいよ深くなるばかりです。

地球に近い月へ、ほんと飛んでいくにも、このありさま。

「どちらがさきにかけつくか。」というウサギとカメの歌ではありませんが、どうぞなかよく手をつないで宇宙旅行の道案みちあん内をおねがいしますよ。

ある春の朝、「あら、さいたわ。」と、庭で、妻が、めずらしく大きな声でさげばます。

「ちょっときてごらんさいよ。」

そういわれたので、こたつにあたっていたわたしも、いか